

No.118

公民館だより

平成15年7月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

日々想う

由良地区公民館長 飯澤登志朗

最近あまり感動しなくなった、あるいは感動するようなことが少なくなった。こんな話を耳にすることが多くなりました。

少し古い話題になりますが、大相撲で先程引退した横綱貴乃花が一昨年五月千秋楽、怪我をしながら鬼の形相で優勝した場所、小泉総理大臣が天皇賜杯を渡しながら云った「よくやった、感動した」。アテネオリンピック女子マラソンの有森祐子「自分で自分をほめたい」等スポーツ番組での感動が比較的が多いと

思います。

昨年十二月から毎日新聞に連載された佐藤健記者が綴る「生きる者の記録」。

末期がんに侵された者にしか書けないルポでしたがその反響がすごく、読者から手紙やメールが続々と寄せられ、その関心の強さ、大きさが窺われます。多くの人たちが同じ病気で苦しむ、また勇気を与えられたとしても闘病する本人はもち論、ご家族の苦しみ悲しみは筆舌に尽くしがたいものがあります。

NHK放送番組で「なぜ急増、笑わない赤ちゃん」を見ていて辛く悲しくなりました。

少子高齢化が進み、子どもが少なくなっても親の愛情が十分受けられず、大人不信が原因とのこと、乳児の頃の体験が成人してどんな人生があるのだろうか。保育士の懸命な対応で少しづつ笑顔が戻ったとのレポに僅かに安心しました。

由良地区の現状を考えますと少子化問題では、小学校児童数が八十名余り、後五く六年すると五十名以下となりそうです。私たちの小学生時代は、三百人以上が校庭を走り廻っていたことを思い出すときみしい限りです。

公民館の取り組みとして、宮津市が発表した「子どもがのびのび育つまちづくりプラン」があり、その趣旨を踏まえて取り組みを始めています。また地域全体では、剣道教室や少年野球クラブ、さらに空手教室、囲碁

教室、浜の子ナーサリー等々、子どもを取り巻く環境改善に多くの方が参加されています。

高齢化問題についても否応無しに割合は高くなり、平成二十五年頃ピークに達するようです。地域の医療問題、独居老人や後継者問題等取りまく環境に明るい見通しはあるのでしょうか。宮津・天橋立道が開通したことに、観光客の流れが変わり不安になります。

あまり悲観的なことばかり考えていても解決できませんが、与えられた環境のなかで、最大限力を合わせて地域の活性化に協力しようではありませんか。

最初に感動することがないと述べましたが、本当にそうなのでしようか。世界中の情報がテレビやインターネットで居ながらにして入ってくる時代、活動する先進地の情報を集めながら、感動を覚える地域づくり、まちづくりを進めたいと考える日々です。

平成十五年度 由良地区公民館役員名簿

(順不同・敬称略)

主事 枝川 隆 亮

【運営審議会委員】

- 由良小学校長 倉野 英明
- 由良自治連合会長 北野 誠治
- 脇自治会長 上良 高祥
- 宮本自治会長 小松 博
- 浜野路自治会長 竹村 寛三
- 港自治会長 森川 耕一郎
- 下石浦自治会長 柘田 九兵衛
- 上石浦自治会長 山下 正男
- 市議会議員 大森 秀朗
- 前公民館長 酒田 治
- 学識経験者 四方 寿朗
- 由良幼小学校PTA会長 浜崎 利雄
- 栗田中学校PTA副会長 小室 秀雄
- 由良婦人会会長 吉田 あい子
- 松寿会会長 山口 幸一
- 由良子供会連絡協議会会長 岡本 慎一

【公民館役員】

公民館長 飯澤 登志朗
主事 枝川 隆 亮

【分館長】

- 脇分館長 松林 富次雄
- 宮本分館長 竹田 茂
- 浜野路分館長 大森 章弘
- 港分館長 山田 訓久
- 下石浦分館長 野村 一雄
- 上石浦分館長 岸田 秀樹

【幹事】

- (文化部)部長 中西 衛
副部長 足立 登紀子
- 中井 浩彦・亀井 正一
 - 榊井 満夫・塩森 啓子
 - 中西 一雄・岸田 国彦
 - 市場 正治・中西 達也
 - 野村 和之・山下 正貴

吉田 あい子・坂下 好美

(体育部)部長 浜崎 利雄

副部長 千坂 幸雄

副部長 岸田 八重子

浜田 宏信・有田 吉尚

西之上 昌代・小西 衛

吉元 誠司・由利 晶子

大森 智朗・中西 一就

大森 美和・中西 利一

山田 直美・柘田 衛

山下 明美・野村 雄治

岡田 たつ子・小田原 道子

(体育部講師) 小室 文雄・森田 美砂子

平成十五年度事業計画

【文化部】

盆踊り大会 (地藏盆)

八月二十四日

文化祭(婦人会協賛)十一月三日

人権学習会 十二月七日

四部対抗区民囲碁大会

一月十八日

自治学級

二月十五日

生涯学習会講演会(婦人会共催)

二月二十二日

公民館だより発行 年三回

由良歴史年表編纂事業

周年

【体育部】

由良岳登山(第三十七回)

四月二十九日

第十五回宮津市地区対抗駅競走大会(北部コース) 六月一日

四部対抗バレーボール大会

六月二十二日

四部対抗球技大会(ソフトボール)

八月十四日

区民運動会 九月七日

歩こう会(小学生・保護者・一般)

十月十九日

ミニバレーボール交流会(市教委)

十月〜二月 八回実施

【子どものびのび体験活動】

(子供会連絡協議会共催)

京都府―土曜子ども活動支援事業

京の伝統工芸品教育活用推進事業

を利用

子どもに本物の伝統工芸品に触れる機会を与え製本体験を実習させる。

行事報告

主 事 枝 川 隆 亮

◎二月二十三日(日) 生涯学習講座会

本年の生涯学習講座会は宮津市人権擁護委員協議会 会長 小室二三子先生に講師としてお願いし実現しました。

男女共同参画基本法が制定されるまでの日本社会の背景・法の誕生に始まり、その基本法の制定を受け、これからの取り組みと各個人がいかに認識するべきかを講義をしていただきました。

◎四月二十九日(火)

由良岳登山

第三十七回由良岳登山を実施しました。

数年来四月二十九日は晴天に

恵まれていますが、今年も絶好の登山日和となりました。

宮本地区榎本清氏の準備体操ののち登山を開始しました。

二日前に観光協会の十三名の方々と、登山道の整備に上りました。風倒木をチェーンソーで伐採、イバラなど登山道に伸びてきている草、木の刈り込みなどを、約四時間かけて行いました。昨年度に比べ今年、東西両峰からの眺望はさえぎる物がなくなり、素晴らしいものになりました。

今年も二三名の多くの方々に参加していただきました。

遠方では姫路からの五名のグループ。又、綾部・弥仙山(五九九m)の頂上から丹後の名峰由良岳の姿に魅せられ、下山後すぐ由良に来られた神戸の夫婦

もおられました。

最高齢者は市内の野村匠さん八十歳、最年少は駐在所中川さんのご長男開太ちゃん一歳五ヶ月でした。

登山者全員事故もなく、無事下山することが出来ました。

◎六月一日(日)

地区対抗駅伝競走大会

台風四号の影響で小雨がやまず、大会終了まで風が強く寒いコンディションの悪い日となりました。

五月六日より、津田一さんたち

のコーチ陣の指導によりナイター練習を開始しました。

今年「ふるさと出場」ワクを利用し、大学生川崎祐介(港地区)さん、岸田祐佳(上石浦)さんの二名の方々に出場をしていただきました。

成績は六位(参加十一地区)でありました。

四名の方々が表彰されました。

特別表彰者 田中昭義さん

15回出場者 津田 一さん

新宮鶴雄さん

5回出場者 岡田朋子さん

今、教育に思うこと

由良小学校長 倉野英明

この四月より、由良幼稚園・小学校にお世話になることになりました倉野です。赴任して思うことは、保護者、地域の皆様の学校教育に対するご理解、ご協力はもちろんのこと、園児・

児童を地域の子どもとしてみんなで温かく見守り育てていこうといった気風をあちこちに感じます。そのためにも、皆様の期待に添うべき、全力を挙げて幼稚園、小学校の教育に邁進しな

ければならないと思つています。さて、昨年の秋、二人の日本人がノーベル賞を受賞するといった快挙に日本中が沸き立ちました。その二人を例にとり、教育について書いてみたいと思ひます。

一人は、化学賞を受賞した田中耕一さんです。田中さんは、謙虚な人柄と誠実さで癒し系ともてはやされ、世界的なすばらしい発見もさることながら、マスコミが挙げて報道することにより人間性の方でも有名になるといった現象が起きました。

しかしながら、田中さんも、順風満帆に今になったのではなく、入った大学は留年し、就職も第一希望の会社は落ち、今の会社に入られたそうです。そこで配属されたところは、自分が大学で学んだ工学関係ではなく、化学の知識が求められる研究でした。足りない知識を粘り強い執念と努力でカバーし榮譽に浴されました。

もう一人は、物理学賞を受賞した東京大学名誉教授の小柴昌俊さんです。小柴さんは、中学一年の時に、小児マヒにかかり、両手両足が動かなくなりました。そのため、その当時抱いていた将来の夢も諦めなければならなくなりました。自宅で療養しながら悲しみにくれたと、著書「やればできる」に書いています。

しかし、いつまでもよくよく悩んでいても仕方がないと一念発起し、家の中ではったり、立ち上がったたり、歩いたりする訓練をがんばってすることにより、不自由でも歩くことができるようになり、学校に行くことになりましたが、バスに乗り降りすることができないため、四キロの道のりを足を引きずりながら通ったそうです。そうして、一生懸命勉学に励み、世界最高の賞と言われるノーベル賞の榮譽に浴されました。小柴さんは、「自分のおかれている環境は、そんなに簡単に変えることはできない、

これはいやだ、あれはだめだと言つても仕方がない。そんなことよりも、その中で自分は何ができるかを考えることが大切である」

と、言っています。

「為せば成る」のことわざもあるように、最初から自分は無理だとか、できないとすぐに諦めるのではなく、真面目に努力してみる。くじけず続ける。よい結果が出ると信じてがんばる。

このことを今回の受賞は、私たちに教えてくれたのではないかと思います。このことは、まさしく昨年度からの学習指導要領の中でいわれている「生きる力」そのものです。生きる力とは、

受け継ぎたいこと

栗田中学校校長 三田 剛 資

この頃の青少年のマナーの悪さについて論じられることがよくある。先日、宮福線を利用し

(一) 自ら学び、自ら考え、主体的に判断したり、問題を解決する力、社会の変化に主体的に対応できる力 (二) 相手を思いやる豊かな心 (三) 少々なことではくじけない強い心と身体等です。そのことは、変化の激しい行き先不透明な時代と言われる二十一世紀を生き抜く児童生徒にとって身に付けなければならぬ大切な資質です。

そのため、児童たちに「生きる力」を育むため、歴史、文化、人材に恵まれた由良地区の特色を生かし、更に由良小学校の教育を進めていきたいと考えています。

出張することがあった。朝の通学時であったので、列車はかなり混んでいた。空席を探して

車中に目をやると二つの座席の一方にはカバンを置き、もう一方の席には、家を出る時刻が早いのか熟睡の様子で眠りこけている高校生が座っていた。眠りを妨げ、「座ってもいいかな。」と声をかけ、席を確保した。終

点に近づくとつれて乗客が列車から降りるのに遅いことに気が付き、乗降口通路に目をやると高校生五、六人が乗降を妨げるように座り込んでいた。床に尻をつけたいわゆるジベタリアンである。乗客は遠慮がちに座っている高校生の間に足を踏み入れて降車を、新たに乗りて来られる方々も同様である。

私たちの年齢の者は人を跨ぐようなことは実に失礼な行為であると理解している。人を跨ぐ行為は今の子ども達にとっては、家の中で日常的なことであり、親を跨ぐことにもさほど抵抗感はないのではないかとの声も聞かすが、当の高校生達の思いはい

行ってくれたらいいとも思っているのだろうか。他人に迷惑をかけていないとも思っているのだろうか。はたまた、全員が座れるような座席を用意しろとも思っているのだろうか。

本校では隔週月曜日には、学朝礼がある。この時は、校長の大切な講話の時間である。私は、この列車内での出来事を子ども達に是非考えさせたいと思いい、「相手を思いやる大切さ」という題で話をした。高校生達は、座る席がないから、余地を見つけて座ったのかもしれない。他人に迷惑をかけているという意識がないのかもしれないが、大勢で過ごす場所では絶えず相手を思いやる必要がある。迷惑をかけていなくても（実際は立派な迷惑だが）世の中には礼儀秩序をわきまえ、お互いが気持ち良い生活を送ることができるよう考えなければならぬ。自分さえ良かったら良いでは、決してこの世の中は成立しない。

本校の生徒達がこの出来事から一人でも今後の生活に生かしてくれたらと思う。

実は今の子ども達はこういった行動が大変迷惑なものであるということも学んでいないのではないだろうか。また、家庭生活でもさほど話題になっていないのではないだろうか。これまでの世の中の常識が家庭や学校の中で受け継がれていないのではないだろうかと思う。義務を履行しない個性の重視や新しいことを追い求める中で価値観が錯綜し、日本人の持っている良いい伝統である慎み深さや良い意味での遠慮すること、また世間体を気にすることがどこかに追いやられているのではないだろうか。

数年前の新聞の家庭欄にも今の世情を描き出している記事があった。『車の中での親子の会話』と言う題で、車を運転する父親が呑み終えた缶ジュースを窓ガラスを開け、車外に放り投げよ

うとしたとき、横に座る小学生の男の子が「学校で先生がそんなことしたらあかんとっていいな。」と父親に注意したら「かまへん、かまへん。誰も見てへんし。」とって車窓から投げ捨てたという内容であった。残念ながら今の世の中はこのように大人が子どもを悪くしている例もある。

学校は教科書の中の勉強ばかり教えるのでなく、こう言った道徳の内容も時間を取って教えている。取り巻く状況からすると核家族化の中で、子ども達に日本の心を受け継ぐことが少なくなっているが、学校と家庭、地域が情報を交流し、これからの日本を担ってくれる子ども達にマナー・礼儀・秩序等をしつかりと教え込まなければならぬいと痛感する次第である。



明治八年の算数

由良子供会連絡協議会会長 岡本 慎 一

心ならずも大役を仰せつかりました。役員の方々はじめ皆様に変え迷惑をおかけすることと思いますが、努力を尽くしますのでご指導、ご協力を宜しくお願いいたします。

さて、突然ではありますが、先日、偶然「小学筆算教授本」というものを、見る機会に恵まれました。明治八年五月発行となっており、その名の通り、小学校の先生が、子供に筆算を教えるための(参考)本のようにです。当時の理数科教育の程度の高さに感じ入り、拙文にまとめました。

例えば今、12、14、21の最小公倍数を求めよ。なんて言われると、12と14は、何となくわかりやすいが、21がじゃまだなあ。などと算数の苦手な私などは、

全く勘違いな事を考えてしまいます。もちろん、当時、当然その解き方を教えていただいた筈ですが、今となつては、全く覚えておりません。たぶん廻りに、人がいなくなつてから三段の横升を作り、その中に、12、24、36……、14、28、42……などと書いていき、共通の数が、出て来た時に、その数を赤鉛筆のマルで囲むぐらゐの事と思ひます。

各項目毎の開設と設問はすべて漢文書き下し文で、歯ざわりが強く、骨が折れますが、ついて来て下さい。以下原文通り。

最小公倍数ヲ求ムル法(総則は省略した) 規則 第一則各數ヲ横線ノ上ニ記シ而シテ其數ノ二件以上ニ通スル乗子ヲ求メ之ヲ法トシテ其約シ得ヘキ數ヲ約シテ得ル商ヲ其線ノ下ニ記シ

且ツ約シ得ベカラザル數モ降シテ共ニ記スベシ 第二則 次ニ又各數ノ通乗子ヲ求メ、前則ノ如ク約スベシ、逐次ニ如斯ニシテ各商ニ通乗子ナキニ至テ止マリ、而シテ其法數ト終リニ得ル所ノ商トヲ相乗シテ得ル所ノ數ハ即最小公倍数ナリとあつて、前記の問題となりま

$$\begin{array}{r}
 12 \quad 14 \quad 21 \\
 2 \overline{) 6} \quad 7 \quad 21 \\
 3 \overline{) 2} \quad 7 \quad 7 \\
 7 \overline{) 2} \quad 1 \quad 1 \\
 2 \times 3 \times 7 \times 2 \\
 = 84 \quad \text{答八十四ナリ}
 \end{array}$$

また分数ではこんなややこしいものもあります。例、假令ハ時數ニ日九時十八分十五秒アリ、之ヲ化シテ週ノ分數トナス ハ左ノ如シ

日	時	分	秒
2	9	18	45
24)			
48			
+9			
57			
3420			
+18			
3438			
206.280			
+45			
206325			
7×24×60×60			
=604800			
206325			
604800			
=131			
384			

答 三百八十四分ノ百三十一ナリ
まさに「あーしんど」言いたくなりですがこれなどはまだまだ序の口です。

「径度ノ差ニ因テ時刻ヲ推筆シ、或ハ時刻ノ差ニ因テ径度ヲ推筆スルノ法」などは、グリニツシ天文台を 度として、京都やその他の都市の時刻を求める事を要求し、その精緻さを見るにつけ、当時の理数科教育にかけ人々の息吹が感じられるようです。

私達は今、名刺大の計算機でこれらの問題の答を得る事が出来ますが、それには寺子屋といわれた時代からの地味で不断の多くの人たちの研鑽の積み重ねが必要であつた訳であり、今となつては名前は残っていない、非常に多くの先人達の非常に立派な努力に、心動かされる思いです。

透明な婦人会を目ざして

由良婦人会長 吉田 あい子

新緑のさわやかな季節、四季ある中で、私の一番好きな時期です。自然は正直に、四季を運んでくれますが、この春は私にとって大きく違っていました。

改めて振り返ってみると生きてきた中で、この由良に住んでるのが長くなっていました。知らない間に、こんな年になっていました。この度、大きな役をいただき、途方にくれながらも、歩き出しています。地域の中で、いろいろな方にお世話になりました。これからお世話になる事と思います。この役をお借りして、少しでもお返しらしき事が出来ればよいなと思っています。

これまでと同じ様に出来ない事が多く、改革しながら存続する方向であってほしいと思います。様々な場に出掛けて行く事、それは、個々の事情によって思う様にならない事ですが、声をかけ合って時間をつくり、婦人会を利用出来る様だと理想です。婦人会離れの進む中、こうして由良地区が頑張っていることを他の地区の方々に伝えたいし、出来れば、もう一度、沢山の地で、色々な良い意味での競争や情報交換等してみたいのが本音です。その為には、出掛けやすい体制を作り、地域の中でも、家庭でも、理解のある社会であってほしいのです。

男女共同参画を盛んに言われていますが、身近な問題にするには、どうしたらいいのでしょうか？ 男性にも、夫人会があればいいな、と思ったりします。方向性が一緒であれば、お互いに理解も早く、力も入るのかな……なんて単純に、冗談の様な事を考えてしまいました。仕事をすませ、夜に女性が出掛けようとする、朝から大変なエネルギーを使います。現在の由良婦人会は、会員数一五名で成り立っております。年代は二十〜五十代、五十五才の定年で、その後、協力会員さんとして、盛り上げていただいている現状です。

婦人会をもっといっぱい知っていただく為に、書きたい事もたくさんあるのですが、残念ながら、今の私には、文才がありません。何も出来ない一年になるかも分かりませんが、役員の方々、会員の方々のご協力をいただいで、精一杯声を出して行きたいと思います。

これまでの諸先輩の方々の功績をねぎらいますと共に、未熟

な私達を応援していただき、幅広い年代のすみずみまで、口から口へ伝えて、行動できる婦人会でありたいと、願っています。女性の元気は、社会の元気！どうぞよろしくお願い致します。

お知らせ

◎全国教育美術展に、下記の方が受賞されました。

入選 一年生 舛井華菜

五年生 尾崎 華

五年生 中西可奈絵

五年生 山下 豪

六年生 山田久美子

◎宮津市火災予防ポスター展に、

下記の方が受賞されました。

宮津市消防団長賞

六年生 中尾幸奈

駅伝大会

六年 磯田良介

ぼくは、六月一日の駅伝大会に、第七区として出場しました。ぼくは、第六区中継所でアツプをしながら第六走者を待っていました。もうすぐ自分の番がくると思うとどきどきしました。コールがかってから走る準備をしました。

「6番。」

係の人がそう言うと、ぼくはスタートラインに立った。まだか、まだかと思いつながら待っている、と、やって来ました。たすきを受けとって肩にかけて走りました。自分のペースで、ぬいてもぬかされても走り切るつもりでした。

とちゅう一人にぬかされた。その人はどんどん遠ざかっていくように感じました。でも、ペースを上げずにがんばりました。

とちゅういろんな人が応援してくれてすごうれしかったです。やっと第七中継所が見えて、たすきをわたしました。そのときは、全力を出して走れたのでよかったです。走り終わると、係の人がはく手をしてくれました。

ぼくは区間四位で、由良チームは六位でした。自分では満足でした。それは、全力で走り切れたし区間四位でいい記録が出せたからです。秋にも小学生駅伝があるけど、それにも出れるようにしたいです。



初めての駅伝大会

六年 浜本涼

当日の朝早くに、ぼくは目がさめた。なんだかいやにむねがどきどきした。外を見てみると、どうやら小雨が降っているようだ。あまり駅伝にふさわしくない天気だと思った。

それから仕度をし、家を出て、由良の里センターへ行き、全員がそろったところで出発した。

バスの中でもやはりどきどきしていた。補欠なのに……。ぼくは、一区の補欠なので、開会式には出席しないで日ヶ谷小へバスで行った。

やはり雨のせいで運動場がぬかるんでいた。ここを走る人は気の毒だと思った。

予定より早くアツプをした。動かないでいられたからからだ。由良の第一区の牛田君も、いつもより顔がひきしまっていて

た。何もきん張をほぐせる言葉が見つからない。どう声をかければ良いのか分からなかった。少ししてから呼び出しコールがなり、十分後、ついに「十秒前、……バン。」

いっせいに選手が走り出した。その時ちらつと見えた牛田君は、とても勇ましかった。

バスに乗って選手を追った。由良は何位だ。去年まで全くこういう事は思わなかった。けど、今年この場に来て、初めてそう思った。

一足早く市民体育館に着いて、由良を待った。由良は六位だった。いい成績だと思った。

今年、初めて選ばれて、とてもいい体験が出来たと思う。こういうことを力にして、がんばっていききたい。

駅伝大会

六年 牛田 諒

駅伝大会に出場して

六年 中垣 千佳

駅伝前日の夜どきどきしながら待ちました。そして起きた時には、そのほとぼりは、冷めていました。急いでしたくをして里センターに向かいました。

里センターには、もう数人来ていました。会長さんのあいさつを聞いてバスに乗りこみました。気付かなかったけど、また心がどきどきしていました。宮津に着いて、ぼくは第一区なのですぐに他のバスに乗って日ヶ谷小学校に行きました。

そこでアップをしたり、説明を聞いたりました。

2回目のコールがありました。すきをかけてライン近くに行きました。三十秒前と言われると、位置につき十秒前と言われると用意して、「ドン。」

第一走者が一斉に飛び出しました。足場がぬかるんでいて走りにくいから大変でした。でも道路に出ると自分も他の人も勢いが増しどんどんぬかせました。平らな所に出ると、勢いが落ち

後ろの人にぬかされました。でも由良の人達に応えんされると気分が楽になりスピードが出てきました。それから二人ぐらいいぬかせて次の走者にたすきを渡しました。

記録は、八分台で、練習の時より一分ぐらい早くなっていたのでよかったです。

総合で由良は六位でした。またこういう機会があれば出たいです。

六月一日にあった駅伝大会。私はバスに乗ってその会場に行きました。まわりを見回すと、速そうな人がたくさんいそうでどきどきしました。

開会式が終わって少しすると、私の走る第九区に行くバスが来ました。補欠の人といっしょに乗りました。目的地に着くと雨がパラパラ降っていました。準備運動をしてしばらく時間があつたので少し遊んでアップをしました。コースがあまりよく分

らなかつたので、コース確認をかねたアップでした。またUターンして帰ってくると選手の確認がありバスの中でたいきするよう言われました。バスの中は、いつもとはちがう重い空気です。ばいでした。その中にいた私はすぐきんちようしていました。もうそろそろ出てもいいかなと

思い、外に出ると、最終選手確認をしてトップがくるのをならんで待っていました。

「トップが見えました。」

「6番。由良。」

私は無意識にコースの上に立っていました。たすきを持って走り出すと、

「がんばれ、がんばれ。」

と聞こえてきました。なぜか背中をおされるような気持ちでした。一人はぜったいぬかすぞという気持ちでラストスパートにかげました。

「やった。」

走り終わった時は、とてもうれしかったです。

力いっぱいがん張った

六年 尾崎 華

駅伝大会に行つて

六年 中西 可奈絵

宮津市地区対抗駅伝競走大会。

私は由良地区の選手として出場した。走る区間は二区。ユニフォームを着ている人を見ては、速いかな、速そうだなあと、ずっと思っていた。

今日の目標は七分台で走ることと、みっともない走り方はしないことだった。きん張して足が重く感じたり、早い時間からアップをしそうになったり、また、この目標が守れるだろうかという不安もあったりして、落ち着きがなかった。

スタートした。二区だということもあって、どこの地区が何位で走っているかが、直前まで分からない。そうになると、いつ来るのか心配でしかたなかった。由良が来た。栗田の後ろにつらなつた感じで来た。私は、諒

君からたすきを受け取つた時、がん張るぞ、という気持ちでいっぱいだった。

たすきをかたにかけて走る。急な坂道で、足のリズムが速くなる。手をふつて足をあげて、だんだん息もあらく、えらくなつてくる。でも、ペースは落とさなかつた。由良地区のため、応援してくれる人のため、そして自分のため。前に走っている人を見るたびに思った。あの人に追いつこう、と。

ラスト。できる限りの力を出し切って走る。次のお兄さんに少しでも速く、たすきを渡したい。その一心だった。たすきを両手に持って渡す。それから一人一人がたすきをつないでいき、由良は六位でゴールした。たすきには走り終わった人のがん張

り、パワーがたくされ、走っている人の力のもとになったと思う。

駅伝大会当日、由良の里センターに、七時二十分に、集合しました。最初に、あいさつがありました。少しずつ、きん張してきました。私は、補欠でしたが、きん張しました。バスに乗り、市民体育館に行きました。今日は、あいにくの雨で、体が冷えて、寒かったです。

九区に行くバスに乗り、九区に行きました。コースを走つたり、歩いたりして、コースのかわりにんをしました。私は、走らないんだけど、だんだんときどきして来ました。選手の人が、ぼつぼつ来ました。由良は、その時は6位でした。

「がんばれ。」選手の人が走り出した時、なんだか、ほっとしま

した。それから、「がんばれ。」と応援をする人もだんだん増えて、道が見えなくなるほどでした。私は、人と人との間に割りこんで、応援しました。由良の選手の人は、一人ぬかして、五位に追いつきました。それからバスに乗って、市民体育館に行きました。由良は6位でしたが、みんながんばっていたんだし、私ときには、よかつたかなつと思いました。とても、ときどきした、駅伝大会でした。



旅は気儘に パート9

丹後由良ターミナルセンター

駅周辺が、段々美しく蘇ってきているのを、気づかれています方もおられると思いますが、本年度より、月一回、由良環境づくり推進会のボランティアグループの方々にお世話になり、剪定や草刈りと整備に取り組んで頂いております。

長い間、私達の眼を和ませてくれていました夾竹桃は、電気系統の配線の妨げとなる為、やむを得ず伐採となってしまいました。由良ヶ岳を背景に、四季折々の花々、新緑と紅葉、本当に季節毎に色々な顔を見せてくれ、眼を楽しませて頂いております。

桜の季節には、見事な花のトーンネルとなります。

去る三月九日(日)には、実業会自治会の方々により、桜の

苗木を、駅前通に植樹して頂きました。

知られざる桜の名所ですね。幼い頃から、慣れ親しんだこの町、再発見です。

この地を何年か離れていたから感じられるのかも知れません。さて、駅舎に借り住まいをして二年目となります。つばめさんとはいいますと、もう巣立ち、元気に飛びまわっています。頭上に注意しなければなりません。温かく見守って頂き有難うございます。

駅では、色々な方々との出逢いがあります。

「何も無い田舎だけれど、昔のなつかしい風景へと、タイムスリップしよう。」

のんびり、ゆったりと時のたつのも忘れてくつろぐ、心が病

んでいる人も多い現代には、必要なものかも？

何かを求めて旅する人、休息する人、旧蹟めぐりをする人とさまざまです。

我が故郷にも山椒太夫という伝説があり、地元にながら各史蹟を回って見た事はないのですが、各方面より、わざわざ訪ねて来られる方もいらっしゃるようです。

以外に地元に住んでいる者程、知らないという事もありますね。駅に勤めるようになった当初は、いざお客様に尋ねられたら、どう言った風に説明するか、困ったものでした。

随分昔に、本を読んだ記憶があるのですが、うる覚えにしか憶えていなくて、お客様から聞かれたはいいが「確か、こんな話だったと思います。」と言ったようなあいまいな返事の仕方です。「詳しい事は、由良山椒太夫伝説、旧蹟めぐりのしおりに書いてあります。」と言った具合で、

本当に申し訳ない対応の仕方でした。

語りべのように、次の世代へと受け継がれていかなければならないと思います。

風光明媚な姿といえば、我が家の二階より見える、朝もやに包み込まれた切れ間から見える由良川鉄橋、朝焼けに映し出された由良川鉄橋、透けて見える大島(冠島)、小島(杵島)、早起きは三文の得とはよく言ったもの、早起きした時だけに見られる、自然のスクリーンの偉大さに感謝です。



短歌

山口 幸一

何のため此の世に産まれし生なりや幼き遺影はVサインなどして

―二〇〇一年六月八日の児童殺傷事件、池田小学校の子
供達―

かかる世の到来誰が思いしぞ戦中派われらに理解の余地なく
我という断崖を日々削りゆく海はつなつの光りかなしく

大森 美智子

苔むした幹を撫でれば温かし枝垂れざくらの瑠璃寺観音

由良沖のフェリーゆるゆる岬へと吸い込まれゆく巨体見飽きず
馬車を引く茶髪青年はさやけしよ鳥取砂丘に癒すひととき

坂本 妙子

心貧しき我を素直になれと説くポピーは揺れる風にまかせて

野良猫が日溜まりにしばしまどろみてわが足音に身じろぎもせず
朝やけに海は目覚めて悠々と渚に佇む身は癒されぬ

山口 美子

そよ風にのりて花びらふわふわと春に追われてさまよいゆけり
さし芽して咲きたる花は愛しかり白より白き五月のタベ

君の声に真夜起こされて引くカーテン小雨にけむる光かなしも

大森 萬喜子

鶯声おうせいを聞きながら摘む実山椒何キロとならむ明日の出荷に
一面のポピーの原に風そよぎフラワートレイン花の園ゆき
朝々を寺院の鐘は響き来て静かなる里の平和身に沁む

登代子

離れて見寄りて撫でゐる幹肌に手の平温し桜花の調べ

花と幹つり合ひ良きに遠い日を思ひ浮かべりうすずみの桜
さまざまな桜がありて引き揚げの丘にひろがる「タシケント」桜ばな

―「タシケント」は、日本兵が抑留された土地名であり、引
き揚げの地に記念植樹された桜の名前である―

山田 よしの

今はもう海へと戻る術はなし料理店の前の水槽の鯛

引き出しの中にまどろむ紫陽花が目を覚ます今日亡夫の命日
悠々と流れはやがて海に出る捨ててしまおう小さな事は

藤本 史代

追憶の中なる人と見し桜遠世の界に消えて泛ばず

花を見む花を訪ねむ約束も反古となりたり春宵ひとり
花闇に迷いごころを解き放つ散り初む花びら双掌に享けて

中西 夏江

海こえて来るきたSARSよあらあらと心は惑う日の果ての空

SARSの汚染しみを残して帰りゆきし若き台湾人の医師も寂しき
SARS来てSARS去りたる海のまち燦々と夏の日はかがやけよ

そろばん指導の任務を受け

タイ国の田舎に一年間暮らして(四)

シニア海外ボランティア 西野啓子

終回は、タイ国のタブーを記します。

最も尊い人は王様、そして次がお坊様です。道で擦れ違う時もお坊様に触れない様にしながらはいけません。特に女性は話しかけてもいけません。乗合バス等はお坊様の席は最後部に用意されて居て、人との接触は避けられる様配慮されています。飛行機の時は、お坊様が一番に乗り込みます。一般人とは明らかに別扱いだと感じました。

女性の髪には聖なる魂が宿る所とされて居ます。不用意に触れる事は厳禁です。出発前の研修では、子供の頭にも触れてはいけないと学習していましたが、実生活ではそれは感じませんでした。

タイの人は年長者を尊く敬い

ます。胸の上辺りに両手を合わせた姿勢で、その手の人差し指

辺りに鼻を近づける型(ワイと呼ぶ)が美しい礼の作法とされています。二、三才の幼児が、母親、祖母達にこの礼の作法を継がれている場面は、よく目にしました。登校の折、送って来た家人に、ワイで有難うを表現している様子は、とてもほのぼのとした感じのいいものでした。仕事先でも受講の先生達が、私に対してワイをします。自然にワイで答えて居たけれど、ある日注意を受けました。「貴方は私達の先生で、この場で最も偉い人だからワイをされても返さないで下さい。貴方からワイを受ける時は私達が死者と成った時だけです」、少し腑に落ちませんが、それ以後ワイに対して笑顔

で答えるだけとしました。

多人数で食事に行く場合、原則として誘った人が支払います。ガヤガヤと集まって居て時間が食事時となった場合は居合わせただ中で、年長者だったり、お金持とみなされる人が支払います。割勘制は有りません。日本人の場合金持と決めつけられて居る為ほとんどの場合支払い役です。この事で勘違いしてはいけないのは、タイの人の観念の中に、相手に功德を積む機会を与えて居る、と考えるものであって、決してたかかってやろう!ではない事も理解しておきたいです。皆の中で勘定を担当する、と言う事は認めてもらって居る証拠でもあるのです。友達同志の場合、二度御馳走に成ったら、一度は返す。日本と同じ様な感覚のおつき合いです。

タイの人は悪口を言いません。話の中で、つい相づちを求めたりしても、「私はその事は知りません」、としっかり断り、自分が体験した事を例に上げ、こんな

事がありましたけれど、と言う。これは見習う事だと常に感じて居ました。日本だったら「……ネー」。「うんうん」となり、話が盛り上がり、拡がり、果ては聞いて居た身でも発言の張本人と言う事で伝わったりするが、本当にこれは良い!と反省させられました。

大声で言い争う事は下品とされます。人前で個人に対して、大声で注意する事は、たとえその人に否が有っても、大声を出して居る人の人格が疑われると言う事も知りました。

色々あったタイの生活は終わりました。お世話に成った隣組の住民十六人ともサヨナラパーティー涙々のお別れでした。今この何でも十倍の物価高の日本で、果たして以前の感覚で暮らせるでしょうか。スーパーで値段ばかりとにらめっこしている私がいいます。ぜいたくさえないければ一日三〇〇円あれば過ごせたタイの生活は夢の出来事の様です。

ブル(ドック)さんと呼ばれた教師

浜野路 大 森 孝

嘗て、府立舞鶴中学校に「ブルさん」と愛称でよばれて親しまれていた教師が勤務していた。かく言う、私は舞鶴中学校で教えられたことはないし、そのほかの側面でも薫陶に接した訳でもない。ところが以下に述べる点で、印象が殊の外強いので記したい。

先ず初めて「ブル」さんを識つたのは、由良浜で、舞鶴中学の男子生徒を引率して、遊泳訓練中の海を見たときである。昔のことなので、年次は定かでないが、私が舞鶴中学校に入学する以前でもあり、その頃の状況からすると、私の小学五年生か六年生の七月夏休み前だったようなので、昭和十五年か十六年頃と思われる。舞鶴中学校では何日かを由良浜での遊泳訓練にあ

てていた。戦時中のことである。

私は舞鶴中学校の生徒の集団が、教師に引率されて、何と吾が家の前を通って(由良村千式百五拾参番地の式が村道の一部となつている―地籍上)、『丹後由良駅』から、旅館『日進館』の東南側を隊列を組んで、現在の『第一海水浴場』と呼ばれる海浜及び海域で訓練を行っていた。これがこの学校の恒例の行事(校外訓練)になつていた。

今一つ、私の家の前には由良小学校校長の大垣憲太郎氏一家がお住まいであった。校長の長男、浩一郎氏は私より四才年長であつたので、昭和十五年には舞鶴中学三年生(全十六年には中学四年生)。

その後、海軍機関学校に入つて、海軍生徒となる前で、舞鶴

中学生徒であつた。彼にとつても、由良浜での遊泳訓練の際は、この由良千式百五拾参番地の式を含む村道を、浜へ通り抜けてゐる。(大垣浩一郎さん宅は由良千式百五拾八番地の式)

『ザック』『ザック』『ザック』と寝ている頭の上を、突如集団が近づいてくる。大勢の靴音と、『ワイ』『ワイ』の騒音である。その日、縁側で寝ころんでいた私は魂消て起き上がった。すると、舞鶴中学の生徒の二列縦隊の隊列が、教師を脇において、次から次へと止めどもなく、家の前の村道を通り抜けて海浜へ向かつて行く。まるで一陣の突風のように、地響きをたてながら。毎年この時期には私にとつては、前ぶれもなく、突如として現れる大集団に愕き、ミニ軍隊の隊列を見送る羽目になる。そんな中学生群の中に、「ブルさん」が、まるでみくちやにされながら、麦藁帽子を頭に被つて佇んでいたのである。顎紐で

帽子を結わえて、その頬が豊かで垂れ下がって、一見茫洋として、大人(中国流で言う)の風貌さえあつた。端然として立っていた。

が、海へ入ったら、途端にブルさんは大変であつた。満を持して待っていた悪童たちに水を浴びせられるのである。追われるのである。麦藁帽子めがけて、生徒の何人かが、さかんに『パシヤ』『パシヤ』と水をかけて追いつめて行く。浜辺から見ている、小学生の私はいらいらする。先生が悪童たちによつていじめられている。何とかならぬのか。名状し難い不快感がどつと湧いて苦々しい。

ところで麦藁帽子の方は慌てる風もなく、避けては右へ左へ悠々と泳いで行く。まるで、悪童達と遊びを楽しんでいるかのようである。実に余裕がある。なぜか、私はこの光景が鮮烈に頭に刻まれた。「ブルさん」を救けることを念つたからか?

小学五年だった私には、「ブルさん」先生唯一人が、悪童達はじめに逢っていたような光景として残った。

私は第一海水浴場で、舞鶴中學生たちの訓練を観察しては、とりとめもなくあれこれ思った。けれども、浩一郎さんは大勢の中で、いつも見出すことはできなかった。

昭和十七年に私が府立舞鶴中学校へ入学した時、脳裡に生き続けていた「ブルさん」先生はどこにもいなかった。どこかへ転勤されていたのか、親しみを感じていた先生がいなくて、がっかりだった。

迎えた七月（昭和十七年、一年生の夏）郷里由良の浜辺で行われた同校の遊泳訓練が、学校の歴史上最期の行事となった。奇しくも私は初めて訓練に参加して、曾つての「ブルさん」が泳いでいたように、往時を偲びながら時間を過ごしていた。級友だった福井県高浜町よりの通

学生だったN君たちから、散々

『由良の浜べがつまらない』『海水浴場として、劣っている』『等々貶められ乍ら私はこの地上より永遠に姿を消してしまおうだろう遊泳訓練を予見することなく、落ち着かない気持ちだった。』

はからずも、「ブル」先生と再会したのは、昭和十五年より算えて十八年目（教師を初めて七年目）の八月後半、場所は舞鶴市の竹屋町の「ブル」先生の住宅の二階の道路を見おろす板の間であった。それに、下を通った私をよびとめて、「ブル」先生と引きあわせたのは職場の同僚で、（当時私の所属していた山城

高校一学年主任）舞鶴中学校の大先輩でもあった浅野勝郎先生を間に介してのものであった。昭和三十三年夏休みもお盆過ぎで、偶（たま）私はぶらぶら、竹屋町の町中の通りを南へ向かっていた時、その千載一遇の邂逅がやってきた。

「ブル」先生は籐椅子に坐っ

て、テーブルの向かいには浅野氏が坐り、笑いも交えて対談中だった浅野氏がいろんな話題を持ち出して語り続けるのを、「ブル」先生は「うん」「うん」とうなづき、聴いている風だった。自分から話をきり出すような風ではさらさらなかった。どこか病気なのかなと訝（あや）まった。そんな中で、浅野先生は飽く迄謙（へん）つて話題を選んで良い雰囲気をかもし出しているようだった。

ブル先生の様子は殆ど、かの十八年昔の由良浜でのそれと変わっていないのかなと思えた。既に退職して、「恍惚（こころざし）」なのかなと失礼な想いをめぐらしていた。

『戦時中に、生徒と一緒に由良の浜で水泳をされていましたね。その時に麦藁帽子を被って泳いでいられたね。』思い切つて切り出したものの、「ブル」先生は、私の問いに顔色も変えず、黙りこんでいられた。年齢をとられたんだな？ そんな雰囲気の中で、物故した大垣浩一郎氏

について覚えておられるか。どうですか？の話題を切り出せなかった。浅野先生との話しあいが終わる迄、自分の腹にしまいきこんでしまった。

—浩一郎先輩が戦争に出撃して、潜水艦と共に沈没した人生、そして青春時代、逃れる術のなかった生きざまに関しての事も。—（二〇〇三年一月二十九日）
付記 ブル先生とは舞鶴市の方で、『田中潔（きよ）』さんと呼ばれ、旧制の京都府立舞鶴中学校を昭和十四年度に卒業しておられる。それから母校で教壇に立つておられた。（終）

スポーツ

◎平成十五年四月十三日
宮津与謝少年剣道大会

団体（中学生の部）
優勝 由良少年剣道教室
団体（小学生の部）
第三位 由良少年剣道教室

由良の地名

—その七—

小谷 一郎

私は由良に住むようになって、由良というところは一体どういうムラなのか、果たしてこのムラは農村なのか、それにしても田畑は余り広くはない。海辺にあり漁をするにも条件はそろっているし、由良川もそういう仕事ができないということもないといえると思います。海村かといつて明治中期まで帆船ばかりでなく汽船の船長として交易に従事した人々もいたことも判っています。海に出る人々があった一面、海辺で塩作りをしていた所謂「丹後塩」の一大拠点でもありました。そして、こんな由良に天神さん—日本の古来の神としては、天水分神—といわれる水の神—が祀ってあるのは何処なのか。田畑の耕作に係の深い農耕の神は祀られている形はどうかということを考え

てみたのです。そして、由良というところに、もっともありえた形はどうかということであろうか。それは、由良岳というムラの山を無視することはできないだろうと考えついたのです。例えば、それは一つにいえば由良の高嶺に坐す天の水分の神ということにならないかということとです。その条件に合うのが天王山だったのです。天王山は、牛頭天王という仏さんが祀られているのでそう呼ばれているのです。天王山は由良ばかりでなく、京都府下では、大山崎にある天王山は、天正十年（一五八二）、羽柴秀吉と明智光秀が山崎で戦ったとき、その戦局を左右する要点であるとした両軍が、其処にそびえる天王山を争い、これを奪った秀吉の軍が勝利を収めた

史実は有名なことです。そのほかにも、船井郡、綾部市などにも天王山と呼ばれる山があります。ところで、この天王山に祀られる牛頭天王という仏さんは、疫病や農作物の害を払い除く農耕の仏として信仰を集めていたのが、播磨国の広峯天王社でした。由良の天王山が古い時代、どのように祭られていたかはつきりしませんが、由良の東崎（今の宮本の一部）に、「広峯講」が結ばれ、広峯代参が行われていたことが分かっています。（昭和七年六月、由良尋常高等小学校編「郷土調査」九四—九七頁「郷土ノ生活」参照）しかし、この由良の東崎の人達と広峯天王社のかかわりが、どうして生まれたか、由良に史料はありませんが、室町時代には足利幕府に協力して戦うことで力をつけていた広峯天王社は、近隣十ヶ国の農村に影響力を及ぼし、金品の寄進を中心に結合する檀家を組

織していたことを示す史料があります。（「兵庫県史」史料編「中世」二）それで広峯社の社家である肥塚家所蔵の檀那関係文書を見ますと、正和三年（天文十二年）一三二—一四〇—一五四—の間に丹後国加佐郡河守

小侯村
 小侯村
 毛原
 赤石村
 久田美
 般若寺村
 富室村

等、加佐郡でも由良川筋の地名が檀那の地として書き上げられています。このように広峯天王社との深いかかわりをもっていた村々が、由良の近い処にあったことをみると、広峯天王社に対する崇敬の風が、由良の人々にも何らかの影響を与えてきたことは当然であったこととすし、天王山に牛頭天王をあげめ祈ってきた東崎の人々が、昭和の代まで広峯講を結び代参の行事を

行われていたのは当然のことと思われまます。

牛頭天王を祀った社として京都八坂の祇園天王社が余りにも有名で、その感覚がありすぎて、天王社といえは農業神とみずに御霊信仰の上の天王社という意識をもちすぎたようです。それは私のことだけでなく、神仏分離が行われた明治初年、府下でも八坂神社が数多く祀られることになったことをみると、牛頭天王を祀っていた所で、京都の祇園天王社に習って、同じ八坂神社と名乗り、或いは勧請したと称したものであろうと思えます。

例えば、平凡社刊「京都府の地名」を見ると、宮津市宇宮村に八坂神社があります。私は子供の頃に、祇園さんの縁日に行ったり、蛸狩りに行ったのを覚えていますが。勿論、その頃には、正式の名称が八坂神社ということを知りませんでした。

京都八坂の祇園さんとして有

名な八坂神社は、貞観十八年(八七六)、当時は疫病が続いていたので疫病退散を祈るため、播磨国(現兵庫県の一部)の広峯天王社の牛頭天王を遷して「祇園感神院」として祀ったものです。明治になってから八坂神社と称されることになったのです。広峯天王社も祇園天王社(祇園感神院のこと)の元宮として広く崇敬を集めることになったことは当然のことでした。それにしても、庶民の怖れる疫病退散のための祇園の祭りは、祇園天神とも呼ばれて庶民の信仰を拡げていきました。

この疫病を怖れる庶民ばかりでなく平安の都の人々を怖れさせるものがありました。平安を望む人々の住む都の闇にうごめく怨霊の怖れでした。日本の政治を変えるために都を遷す大事業の影で怨みを抱いて敗れ去った人びともあったのです。桓武天皇の周辺だけでも、父の光仁天皇が即位されると、皇后に立

たれた井上内親王の子、他戸親王が皇太子に立てられたのです。処がこれに反対して山部親王(後の桓武天皇)を推す派の策謀によって二人が共に廃されて、後に山部親王が皇太子についたのですが、奥州地方で反乱が起り、国政に難問が増えることとなりました。

山部親王が即位して天皇になられると、同じ高野新笠の子である弟の早良親王を皇太子に立てられました。そして延暦四年(七八五)九月、長岡京造管使である藤原種継が暗殺されるといふ事件が起こり、早良親王がこれにかかわったと疑いをかけられ、無実を訴えて食事を断った親王は憤死されたのです。すると、その翌年には母の新笠が、その翌年には、皇后の藤原乙牟漏が三十一才で没するという悪い事が続いたのです。そして、このことは早良親王のたたりであると言われたのです。それから後も、政争が続く中で、怨み

を抱いて死んだ人びとがあったり、その怨念のたたりを怖れてその怨念をしずめる祈りの行事をしました。それが御霊の信仰です。その御霊会が貞観五年(八六三)、神泉苑で行われたのです。そして、その最後の御霊として菅原道真がこれに列なるのです。道真は配所の太宰府で、失意のうち死に死します。延喜三年(九〇三)のことです。それから暫くして藤原時平が死去したり落雷や旱害が続いたのです。これは道真の怨霊によるものに違いないと怖れた人々によって神号を与えられ、北野天神社の地に北野天満宮が営まれ、道真を祀ったのです。これが北野の天神さんなのです。

火雷天神として怖れられた道真の神号は「天満大自在天神」で「大政威徳天」と称されました。(東京創元社刊「新編日本史辞典」参照)次に続くことにはします。

(平成一五・六・八)

由良に住んで四十年

思い出すままに (十一)

由良川と私 II

四方寿朗

太古の昔から由良の地と由良川とは、切つても切れない関係にある。にも関わらず由良の人は洪水の災害に遭わないためか、案外無関心のようなのである。二年前に発行になった小学生のための冊子「わたしたちの由良川」は我々大人にとつても大変参考になるよい資料で、是非一読を勧めたい。また、平成十一年発行の「八雲のれきし」とその写真集も同様に極めて興味深い。これらを参考に私の由良川への思いを書くことにする。

最初の写真は浜野路の大森萬喜子氏から「由良の歴史をさぐる会」へ頂いた貴重な写真である。「八雲のれきし」によると、この藤津の舟橋は明治三十四年四月に造られた。大森賢司氏の

お爺さんが船大工をしておられた関係で、お持ちだったらしい。写真の下に「宮津港東堀川……」の文字が読み取れる。撮影者の住所だろう。写真のこちら側が藤津、現在の高田荘の裏山から撮影し、対岸が八田と思われる。船を一列に浮かべて、その上に板を並べたもの。洪水に悩まされた昔の人の知恵と苦心の結晶である。しかしこれも明治四十年の大洪水で流出し、その後明治四十二年に造られた木造の橋も度々の洪水に流され、昭和二十八年にやっと現在の鉄骨大川橋が竣工し、以後は今日まで度々の災害に耐えて来た。しかし、これも又老朽化し、現在新しい橋が建設中である。このように由良より上流の人々にとって由

良川の問題は、なんとと言っても度重なる洪水災害だった。なにしろ由良川は昔福知山付近から南へ流れて瀬戸内海へ注いでいた。その後の地殻変動で現在のようになり日本海へ流れるようになったが、福知山から由良までの勾配が緩やかなので、雨が続くとすぐ氾濫する。昭和三十六年美山町に大野ダムが完成してからは少しよくなったが、それでも、由良は「大量のゴミが浜へ打ち上げられて困る」くらいの害で済んでいる時、上流の地域は大変な被害を受けていた。

洪水よりも由良にとって恐ろしいのは、台風時に海から押し寄せる高潮である。次の写真、これは現在の港児童公園の国道を越えた川側に建っていた山元製材所が、昭和四十七年九月十九日の高潮で、一度に壊滅したのを翌日、私が撮ったものである。その時、ちょうど現場に居合わせた私は、沖から迫って来る大波が、恐ろしくてただ逃げ

るだけだったのを覚えている。和江の国道の由良川沿いに高さ二・七メートルの大きな石碑が建っている。「瀬戸島開鑿紀功碑」である。もともと此処には由良川へ突出した岬があり、水流を妨げて上流の洪水を大きくしていた。慶長四年(一五九九)田辺藩主細川忠興がこの岬を取り除く工事を試みたが、先端の岩石が硬く、当時の技術では歯が立たず、止むを得ず軟らかい岬のつけ根を切断して先端部を島として残した。これが瀬戸島である。以来三百十余年を経て、大正二年、漸く住民の悲願であった瀬戸島除去の工事が始まり、同四年に完工した。この大事業を記念して先に記した石碑が建立されたのである。しかし当時の技術では、水面上〇・三メートルの高さで島は残されていて、災害防止に十分ではなかった。住民の度重なる運動により、昭和三十八年から再び瀬戸島掘削の工事が開始され、今度は水面

下二メートルまでの除去に成功した。その後瀬戸島の下流に土砂が堆積して島となっていた西島を、数年がかりで除去し、やつと今日の和江の姿となったのである。このように由良川上流の人々が、和江に限らず、夫々の地域で長年洪水の災害と戦ってきた事を、由良地区民は忘れてはならない。

ついでに石浦の城島について、私は和江の瀬戸島とその成り立ちとは同じではないかと思う。その昔、川岸から岬が伸びて、水流を妨げていたのを、つけ根を切断して水の流れをよくした。残した先端の島の下流に、自然に土砂が堆積し、細長い島になったのだ。その証拠に、竹の生えている一番上流の部分は、下流の土砂とは明らかに土質が異なる。工法もそっくりだし、これも細川忠興の仕事ではないだろうか。ご存じの方があればお教え願いたい。とにかくこの二か所の改修工事で、川の蛇行がな

くなり、河口の位置が安定し、今日のように、由良川の洪水で由良地区が被害を受けることは無くなったと考える。

次に由良川鉄橋の位置について。「八雲の歴史」によると当初の路線は、下東大船峠から由良川を鉄橋で渡り、対岸の丸田から和江、由良への左岸ルートであった。架橋は下東側で山腹を橋基にして架橋し、橋の長さ凡そ三七八メートルで丸田の田圃に高さ九・一五メートルの築堤をつくり、その上に列車を走らせる計画であった。しかし高い築堤による洪水時の災害の増大を怖れた丸八江、東雲村に強い反対運動が起こり、現在の由良川右岸ルートに変更された。かくて現在の全長六五〇メートルのわが由良川鉄橋の架設となったのである。長い年月度重なる洪水にびくともしないで耐えてきた天晴れな鉄橋。計画書がフイーとで書かれているので、恐らく外国の技術指導でつくられたの

だろう。工事の詳細については「由良の歴史第2号」の中西俊夫氏の記事を御覧ください。折角由良にできた鉄橋、これまで長い間いろいろお世話になった宮津線共々、何とか末永く存続させたいものだ。

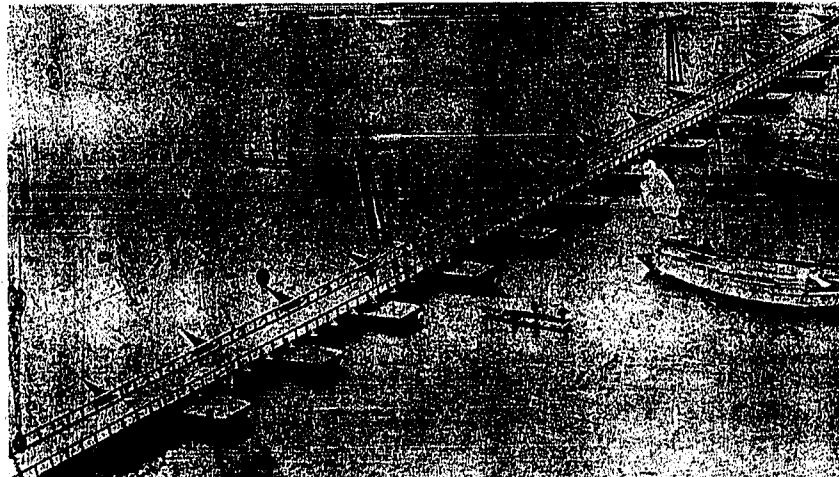
平成八年京都新聞が特集「由良川」を連載していた。次にその八月十五日の記事の一部を引用する。

かつて和知町は府内屈指のアユの産地だった。一九一六年の大阪朝日新聞に「和知のアユは数の多さ、大きさ、美味という点からしても、これに続くものはない」と記され、「毎日一万匹が和知駅から積み出される」と続く。近年は一シーズン三千から五千匹、往時の一日にも満たない。

一九二四年に由良川ダムができ、アユの海からの遡上が不可能となり、漁獲量が激減した。そこで京都府は二八年からダム

の上流に琵琶湖産の稚アユの放流を始めた。(中略)しかし最近アユの縄張り意識が薄れて釣れなくなり、奇形が増えた。人工のアユを入れ続けてきた罪が出てきている。(以下略)

思えばこの四十五年間、私は河口に住み毎日由良川を眺めて生きてきた。防災のため、また経済発展のためとはいえ、すさまじいその変貌を嘆きながら。毎日一万匹という和知のアユの再現は無理としても、何とか少しでも由良川流域に、昔の美しい自然を取り戻せないものだろうか。平成九年河川法が改正されて、河川整備に従来の治水、利水、に加えて環境重視、住民参加の思想が取り入れられた。その計画にも広く住民意識の意見を聴くようになったのは、遅きに失したとはいえずばらしい進歩である。これまで見てきたように、昔の工事は住民自身の切なる願いによって行われた。



しかし経済成長長期以後は次第に官主導型に変化して来た。役人は、住民の幸せなど二番目か三番目にしか考えていない。由良川整備計画にしても、新しい河川法の主旨に則り、人間だけでなく、広く由良川流域に住む多

くの生物の共存を考える。そして役人任せにせず、「自分のことは自分で決め、自分で行動する」という地方自治の理想を貫くこと。私の頭のボケない前に若い皆さんにお願いしておきます。

編集後記

新緑の由良岳登山、山頂ではこぶしの白い花が咲き、遠くは姫路や神戸からの参加者を交え盛会でした。毎年のことながら登山道整備をしていただいた観光協会由良支部の皆さん、ありがとうございました。

西野啓子さん「タイ国の田舎に一年間暮らして」四回に亘っての寄稿でしたが、私たちの生活に比べて厳しさのなかに明るく逞しく生きる現地の人たちの様子に触れることが出来ました。公民館も、平成十五年度新しいスタッフでスタートしました。地域の大勢の方々に支援されて活動を進めてまいります。

(飯澤)



あいさつ標語

あいさつは 心をつなぐ 手をつなぐ

宮津市民憲章推進協議会